

薬物依存者リハビリテーション施設における SMARPP： フィールド調査に見られる「効果」¹⁾

南 保輔

論文要旨

薬物依存者リハビリテーション施設における認知行動療法のプログラム (SMARPP) を調査した。本論は、その概要とともに、プログラムの効果を示すデータを提示する。プログラム中のやりとりとインタビューとから、参加者の発言に照準した記述をめざした。

SMARPPの様子をビデオカメラとICレコーダで記録するとともに、参加者の個別インタビューを実施した。施設での活動のメインである「言いつばなし聞きつばなし」ミーティングとの比較も求めた。

回復経験の長いひとのあいだではSMARPPより「言いつばなし聞きつばなし」ミーティングが高く評価された一方、回復経験の短いひとはSMARPPのほうがやりやすいと感じていた。SMARPPの役に立つところとして、テキストから得られる薬物依存のメカニズムや回復のための実践的な知識と、SMARPPが毎週1回決まった時間に行われたりテキストに書き込みをしたりできるという形式性が挙げられた。SMARPPと「言いつばなし聞きつばなし」ミーティングの組み合わせが効果的であると感じている参加者もいた。施設のスタッフは、その回復プログラムにSMARPPを取り入れることの効果を感じていた。

キーワード：薬物依存、回復、SMARPP、認知行動療法

1 SMARPPとは

SMARPP (スマープ) とは、「Serigaya Metamphetamine Relapse Prevention Program (せ

りがや病院覚せい剤依存再発防止プログラム)」の略称である。精神科医の松本俊彦が中心となり神奈川県立精神医療センターせりがや病院 (当時) で開発が始められた。

1) 本論文は、科学研究費補助金基盤研究 (C) 17K04154「薬物依存者の「回復」コミュニティのミクロ社会学的研究」(代表：南 保輔) の研究成果である。調査に協力していただいた施設のみなさんに大いなる感謝を表したい。なお、個人名などは匿名化している。

松本 (2015: 167) によると、開発の「着手」は2006年である。南は、その初期版を使った刑務所での試行プログラムの効果研究を実施している

(南 2008)²⁾。その後、矯正においてこのプログラムは正式に採用され「J. MARPP」と呼ばれるものとなった。平井秀幸と南は、女子少年院におけるこのプログラム使用の調査も後に実施した(平井・南 2014)。

SMARPPにはいくつものバージョンがある(松本 2015)。松本自身が使用するためのものでも、28回セッション版(SMARPP-28)、これを縮めた16セッション版(SMARPP-16)、そして24セッション版(SMARPP-24)がある。これらは、松本の新しい所属先である国立精神・神経医療センター病院でも使われてきた。また、ほかの精神保健福祉センターやダルク(DARC)³⁾といった薬物依存者リハビリテーション施設でも採用されており、それぞれ専用のプログラムとワークブックが作られている。なお、16回(セッション)や24回(セッション)といったまともは「クール」と呼ばれている。

SMARPPは精神科病院で開発されたものだが、誕生以来約10年が経過しいろいろな施設や場面で実施されている。本研究の対象となったものは、病院の外来プログラムとして行われているものとはかなり異質だと言われている。本論の最初の部分では、参加者などの特徴をある程度詳細に報告するが、それは、調査対象のSMARPPの特性を描き出すねらいもある。

2) 松本は、刑務所プログラムの冒頭に行っていた受刑者とのやりとりを紹介して「依存症は罰では治らない」と述べている(2015: 164-165)。南はこのときの調査で、このような松本と受刑者とのやりとりを直接観察している。

3) DARCとは、Drug Addiction Rehabilitation Centerの略である。薬物依存者の入寮型リハビリテーション施設で、2018年時点で全国に約80のダルクが開設されている。

2 施設と調査

調査対象のSMARPPが実施された施設Aは、入寮型の薬物依存者リハビリテーション施設である。ある大都市圏に位置し、ナイトケアホームとデイケアとを有する。調査実施期間の入寮者は約10人で、通所者を合わせた利用者は1日平均15人ほどであった。施設Aでは、2014年からSMARPPを実施している。

回復をめざす人びとのための自助グループとしてNA(ナルコティクスアノニマス;「エヌエー」と呼ばれる)がある。NAは、全国各地で12ステップに基づくミーティングを行っている(相良 2018: 257)。NAのミーティングは原則「言いつばなし聞きつばなし」であり、そこでの発言内容は、批判を受けることもコメントされることもなければ、ミーティング会場の外に持ち出されることもない。

施設Aの回復のプログラムは、NAの12ステッププログラムを中心としている。デイケアで午前と午後に言いつばなし聞きつばなしミーティングをするほかに、夜は近隣のNA会場でのミーティングに入寮者は参加している。その一方、新しい試みとして、週に1回のSMARPPを取り入れている。4か月ほどでSMARPPの1クールが終了すると、次は『ステップワーキングガイド』(Narcotics Anonymous 2012)をしばらく使うということをしている。類似の薬物依存者リハビリテーション施設として、栃木ダルクがSMARPPを取り入れているのが有名である。そのプログラムは「T-DARPP」と呼ばれている(栗坪 2018: 136)。

本研究の調査は、2018年1月からのクールを対象とした。16セッション版(SMARPP-16)を使用したものだが「第5回あなたのまわりにある引き金について」が2週に分けて行われたので、

全部で17回となった。セッションが行われたのは、毎週水曜日の午後1時半から午後3時までだった。なお、本論の記述はクール終了後の2018年初夏時点を基準としている。

会場となったのは、デイケアのかなり細長いメインの部屋である。中央に置かれた長いテーブルに片側6人ほどずつ着席し、参加者が合計10人から12人ということが多かった。長いテーブルの両側からビデオカメラ2台で撮影するとともに、卓上に6台のICレコーダを置いて発言を録音した⁴⁾。

セッション終了後は毎回数人の参加者や施設スタッフに個別インタビューを実施した。調査は、南と大学院生1人(後のインタビュー断片で「X」とした)とで行ったが、南が都合で参加できないときは、ほかの手伝いの学生が参加した。インタビューはICレコーダ2台で録音した。

調査にあたっては、施設長Aの承諾を得た。調査結果の公表にあたっては、施設長Aの確認を得ている。ただし、本論文の内容についての責任はすべて著者南にある。

3 参加者

17回のセッションのいずれかに参加したのは全員男性で28人だった。スタッフが6人で利用者が22人である。各回の参加者数は、少ないときで8人、多いときで14人だった。そのうち、スタッフの参加者は1人から3人、利用者は7人から11人という幅があった。

4) ビデオカメラは、Canon HF-G10とHF-G20でダイワの三脚DST-53に搭載した。ICレコーダは当初はテーブル中央に2台を背中合わせに外側に向けて置いた。その後両端にも2台、さらにその後その間に2台と追加して、終盤には全部で6台となった。

表1 分析対象参加者一覧

仮名	状況	依存物質・障害	参加回数
A	施設長	覚せい剤	1
B	スタッフ	咳止め薬	17
C	スタッフ	咳止め薬	7
D	スタッフ	覚せい剤	10
E	スタッフ	ガス	3
F	スタッフ	覚せい剤	2
G	入寮者	覚せい剤	14
H	入寮者	覚せい剤	17
I	入寮者	大麻	17
J	入寮者	摂食ほか行動障害	16
K	入寮者	覚せい剤	17
L	入寮者	覚せい剤	12
M	入寮者	覚せい剤	15
N	通所者	危険ドラッグ	7
R	通所者	覚せい剤	4

17回すべてに出席したのは、ファシリテータを務めたスタッフBと3人の利用者だった。表1に、本論で主として取り上げる参加者の状況と主たる依存物質、出席回数を示した。スタッフは施設長を含めて6人全員で、利用者は参加回数比較的多かった9人である。なお参加者の仮名は、アルファベット1字表記としている。

表1中の利用者9人の内訳は、入寮者が7人で通所者は2人だった。スタッフを合わせた15人の主たる依存物質は、覚せい剤が9人、咳止め薬が2人、ガス、大麻、危険ドラッグがそれぞれ1人ずつである。摂食障害などの行動障害を抱える入寮者も1人いた。

スタッフBが全17回のファシリテータ⁵⁾を務めた。Bは、ある専門医療機関のSMARPPに3

5) SMARPPでは司会進行役を「ファシリテータ」と呼んでいる。

クール以上参加したことがある。施設Aの通所者だったが、施設長Aがその経験を買って、SMARPPのファシリテータを依頼している。施設AにおけるSMARPPのファシリテータを3年以上務めてきた。

BはこのクールのSMARPPが始まる時点ではSMARPPのファシリテータを務めるのみで施設Aの職員ではなかったが、途中の2018年4月から週3日勤務の職員となった。施設Aは入寮型施設だが、BともうひとりのスタッフEは施設外の居所から通っており、利用者との関わりがほかのスタッフと比較するとやや薄い面がある。

スタッフのCとD、そしてFの3人は寮で居住していた。依存薬物はそれぞれ、咳止め薬、覚せい剤、覚せい剤である。CとFはスタッフ歴がそれぞれ3年と5年であるのたいして、Dは8か月ほどである。スタッフBがメインのファシリテータを務める一方、スタッフ参加者がもうひとりはいたほうが良いということで、交替で参加していた⁶⁾。Fは、SMARPPが行われる水曜日に休みを取ることが多く、CとDの参加が多かった。

この施設のスタッフは全員が回復途上の(recovering)薬物依存者である。そのような存在がファシリテータを務めるところが、医療機関などでのSMARPPとの最大のちがいである。

施設Aの利用者は、入寮者と通所者とに分かれる。7人の入寮者のうち、GとHの2人は比較的

年齢も高く、入寮型施設の経験も長い。その一方、残りの5人(I・J・K・L・M)は年齢も若く、施設経験も短い。

通所者Rは、以前施設Aに入寮していた。退寮後近くにアパートを借りて住んでいる。回復の進展につれてすこしずつ仕事を増やしている。今回のSMARPP期間中に大きく調子を崩して入院治療を受けた。そのために、参加回数は4回となっている。

通所者Nは入寮したことはない。専門の医療機関に通ってそこでSMARPPに参加していたが、週に1回だけでは不十分だからと主治医に勧められて施設Aに通所するようになった。クールの後半に熱心に通うようになり7回の参加だった。

SMARPPが初めてという参加者は表1の15人にはいない。施設Aにおいて、あるいは病院や地域の精神保健福祉センターなどで全員かなりの参加経験がある。次節で取り上げる利用者Uは例外的な存在である。

4 プログラムの構成

今回クールで使用されたSMARPPは16セッション版(SMARPP-16)である(2009年8月改訂版)。全16回のタイトルを表2に示した。このうち第5回が2週に分けて行われた。施設Aではすでに同じテキストを使って何クールもSMARPPが実施されてきた。ファシリテータも、ここ3年はスタッフBが務めてきた。利用者やスタッフの参加者はクール毎に、またセッション毎に変わっているが、大きな流れはある程度固まっていると思われる。以下で報告するものは、そうやって確立されてきた施設Aにおける、2018年前半のSMARPPのやり方である。

各セッションは大きく3つの部分からなっていた。1週間の振り返り、SMARPPテキスト、そ

6) 国立精神・神経医療センターが制作しているDVD『映像で学ぶSMARPP：プログラムの実際とすすめ方のポイント』によると、ファシリテータのほかに「コファシリテータ」という役割の人も参加し、参加者の発言内容を板書し、議論の助けとなるようにしている。施設AのSMARPPでは、このようなコファシリテータという役割を設けてはいなかった。

表2 SMARPP-16のスケジュール

第1回	なぜアルコールや薬物をやめなきゃいけないの？
第2回	引き金と欲求
第3回	精神障害とアルコール・薬物乱用
第4回	アルコール・薬物のある生活からの回復段階
第5回	あなたのまわりにある引き金について
第6回	あなたのなかにある引き金について
第7回	これから先の生活のスケジュールを立ててみよう
第8回	合法ドラッグとしてのアルコール
第9回	マリファナはタバコより安全？
第10回	回復のために一信頼、正直さ、仲間
第11回	アルコールを止めるための三本柱—抗酒剤について
第12回	再発を防ぐには
第13回	再発の正当化
第14回	性の問題と休日の過ごし方
第15回	「強くなるより賢くなれ」
第16回	あなたの再発・再使用のサイクルは？

して、「いつものやつ」である⁷⁾。

4-1 1週間の振り返り

施設AでのSMARPPセッションは、毎週水曜日の午後1時半から行われた。1時をすぎると会場のテーブルのまわりに着席するひとが出てくる。5分まえにはほぼすべての参加者が着席す

7) 国立精神・神経医療センター制作のDVD『映像で学ぶSMARPP：プログラムの実際とすすめ方のポイント』によると、セッションは「チェックイン」、「今日の課題」、「チェックアウト」という3部構成とされているが、施設Aの3要素は、おおむねこれに対応していると考えられる。なお、これ以降「標準形」との対比は行わない。調査したクルの概要紹介が本論の主目的である。

る。SMARPPのテキストとボールペン、そしてコーヒーの入ったカップを各自用意している。

時間になるとスタッフBが、「はい、じゃ時間になりましたので午後のプログラムはじめたいと思います。午後はスマーブです。」⁸⁾と開始を宣言する。続いて、「じゃあ、いつもどおり1週間を振り返ってどうだったかを、どなたからかお願いします。」とBは発言する。

最初の発言者が自発的に申し出る。そのあとは、次の発言者を指名していくかたちで進行する。以下のNの発言は、そのようにして指名を受けたものである。

断片1 Nの1週間の振り返り(12回目)⁹⁾

N：先週の火曜日にちょっとやってしまっ
て、で、あのお気分は最悪だったんです
けど—あのお、〇〇(施設Aのこと)に来
るようになって、あのお、落ち着いて、
落ち着きを取り戻して、なんとかやれて
いるって感じですよ。そんな1週間です。

B：けっこうさいきんはちょいちょい来ても
らってる。

N：はい。

B：うれしいです会えて。

Nは通所の利用者で、依存薬物は危険ドラッグである。危険ドラッグは警察による取締りが進んで、2018年のこの時期にはそれほどおっぴら

8) 発言においては、「スマーブ」とカタカナ表記する。断片中も同じである。

9) 調査対象のSMARPPの回数は「〇〇回目」と表記する。「第〇〇回」というのは、テキストにおける回数(単元)を指すものとする。なお、断片内の(〇)は、南による注記である。

には流通していない。2013年ごろの大流行時から危険ドラッグを使うようになったNは、インターネットを通じて入手している。しばらく使わずにいたのだが、「先週の火曜日にちょっとやっってしまった」。そのために、施設Aに定期的に通所す（「ちょいちょい来」）ようになり、薬物への欲求が「落ち着いて」いるというのである。

ファシリテータを務めるスタッフBは、「うれしいです会えて」と参加を歓迎する受け答えをしている。薬物利用者は家にこもって薬物使用にふけることになりがちだ。SMARPPに参加するために家を出てきて、ほかのひとと話すことは使用の抑止につながる。参加にたいしてこのように「ほめる」というのは、SMARPPのファシリテータが心がけるべきこととされている¹⁰⁾。

施設Aにおける1週間の振り返りでは、大きく分けてその日の体調や気分と、1週間のできごとが報告された。薬物への欲求が出た、使用するところを夢に見たという話もあったが、多くは、なんとなく調子が悪い、あるいは、風邪をひいたといったことである。

出来事としては、NAメンバーのクリーンバースデー¹¹⁾に行った、あるいはみんなでスノウボードに行って楽しかったなどの報告が多かった。時間としては、振り返りの部分は30分ちょっとと

10) 同様の考えの実践として、埼玉県立医療センター医師の成瀬暢也の「ようこそ」外来がある。「患者に対して陰性感情をもたず歓迎の意を伝え、再飲酒や薬物の再使用を決して責めず、対処法を検討することに重点を置きます」（成瀬2017: 64）とある。

11) NAでは、回復のプログラムに取り組み、薬物を使用せずに生きることを「クリーン」と呼ぶ。クリーン期間が1か月や1年の区切りを迎えるバースデーがNAミーティングで祝われる。

いうことが多かった。一番短いときで18分、一番長いときは45分だった。

参加者全員が1週間の振り返りを発言していく。順番は最初の発言者から時計回り、あるいは反時計回りというときも、発言者が次の発言者を指名するときもあった。発言に際して、「アディクトのBです」とアノニマスネームを名乗り、一同から「B」と声をかけられてから発言することが多かった¹²⁾。

4-2 SMARPP 本体

セッションの最初の部分である1週間の振り返りに続いて、SMARPPテキストに入る。各単元は4ページから10ページ、平均で6.3ページであり、解説文と、設問と回答スペースとからなっている。参加者は交替でテキストの解説文を読み、ファシリテータを務めるスタッフBが補足説明を行う。そして、設問に取り組む。各自がテキストに記入したあと、その回答を順番に発表していく。

SMARPPの部分には、30分から50分の時間が割かれていた。一番短いときで31分、一番長いときは64分だった。SMARPPの各回のなかで一番時間をかけたのは、第5回の「あなたのまわりにある引き金について」という回で、2週にわたって行われた。

例として1回目セッションの一部を紹介する。第1回の単元は「なぜアルコールや薬物をやめなきゃいけないの?」というものだった。「アルコール

12) NAは、参加者が匿名にとどまること（アノニムティ）を重視している。そのために、アノニマスネームが使われる。施設Aにおいても、お互いにアノニマスネームで呼び合っている。ただし本論では、アルファベット1文字の仮名としている。

ルや薬物と心の病気との関係」がテーマであり、以下の項目にわたって説明がある。

- (1) 不眠症を悪化させます
- (2) うつ状態を悪化させます
- (3) 衝動のコントロールが効かなくなります
- (4) 暴力犯罪をおこしやすくなります
- (5) フラッシュバックをひきおこします
- (6) 薬物依存症を悪化させます
- (7) 睡眠薬や治療薬の効果を弱めます

続いて、「あなたにとって、アルコールや薬物を使うのはどんなメリット（良い点）とデメリット（悪い点）がありますか？」という設問がある。

この設問への回答を参加者は順番に報告した。表3は入寮者Gのものである。SMARPPにおいてはアルコール（お酒）と薬物はあまり区別されずに扱われている。表3のようにGは、項目によっては「アルコール・薬物」とまとめたり、「覚せい剤を使うと」と特定の薬物を取り出したりしている。その扱いが顕著となるのが以下の部分である。

断片2 やめるメリットとしての刑務所（1回目）

- B： 一周しました。はい、ありがとうございます。
 G： わすれてたなやっぱおれ、やっぱ刑務所やねやっぱ。刑務所っていうの忘れてましたね。やっぱね。
 A： いちばん。いちばん忘れちゃいけない（笑）
 G： そう、いちばんですね。いちばんのが忘れてた。
 B： 使うデメリット？
 G： そうや。行かなくてすむ。すむんで。
 B： あ、メリットもね。
 G： 刑務所。ん、メリット。
 A： メリットもデメリットも。
 G： デメリットもそやね刑務所。ん。

参加者全員による回答の報告が終わり「一周」したところで、Gは自発的に話し出している。覚せい剤をやめると刑務所に「行かなくてすむ」ことを挙げるのを「忘れてた」というのである。そして、「刑務所」が「使うデメリット」であり「や

表3 アルコール・薬物を使うメリットとデメリットおよびやめるメリットとデメリット：利用者Gの回答

アルコールを使うメリット	アルコール・薬物を使うデメリット
<ul style="list-style-type: none"> ・ひととの関係、つながりができる ・自分の思いをストレートに話して、気分が良くなる ・女性との出会いが増えて、いろいろな女性と出会う ・楽しくなる 	<ul style="list-style-type: none"> ・お金がいつもない ・ウソを毎日つく ・仕事を休む ・いつもひとりになる ・自分の身の回りのことがどうでもよくなる ・約束を守らなくなる ・同じことをずっと繰り返す
<p style="text-align: center;">覚せい剤を使うメリット</p> <ul style="list-style-type: none"> ・セックスやパチンコがふだんよりもだんぜん気持ちいい 	
アルコール・薬物をやめるメリット	アルコール・薬物をやめるデメリット
<ul style="list-style-type: none"> ・お金がある ・あまりウソをつかない ・体調がいい ・身の回りのことができるようになる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ストレス発散がむずかしい ・なにかわからないが苦しい ・人との関係性においてつらいときや苦しいときがある

めるメリット」にもなるということが、続くやりとりで確認されている。

Gは、覚せい剤の使用で何度かの刑務所経験がある。もう刑務所には行きたくないという強い思いをもって今回の施設Aでの入寮生活を始めている。「いちばん忘れちゃいけない」という施設長Aの指摘はそれを指している。

SMARPPの全16回の構成だが、第1回では上にみたように、やめる理由・目的を確認するものとなっている。第2回以降は、欲求のメカニズムの解説、欲求をコントロールするための具体的な手段や方策が取り上げられる。薬物やアルコールを使わない生活を続けていくために必要な知識の提供がSMARPPのねらいとするところである。その教えの中核は、第15回の「強くなるより賢くなれ」に表現されている。

アルコールや薬物から離れていることに成功した人は、強いから成功したわけではありません。賢いから成功したのです。彼らは、薬物やアルコールの再使用に陥らないためには、再使用にむすびつく状況から遠く離れておくことが重要であることを、知っているからなのです。逆にそれらに対して近づけば近づくほど、再使用の危険は高まるのです。

賢い人は、引き金からできる限り長期間はなれていることによって、薬物やアルコールをやめつづけることができているのです。(松本・今村 2015: 141)

薬物やアルコールの再使用につながる「引き金」を知り、「再使用にむすびつく状況から遠く離れておく」ことが、SMARPPの教える回復への道である。

4-3 「いつものやつ」

SMARPPのセッションを閉じるときには、その日の感想を述べることになっている。セッション中に薬物の話をして、使用していたときのことを思い出して欲求が出て具合が悪くなってしまうことがあるからだ。

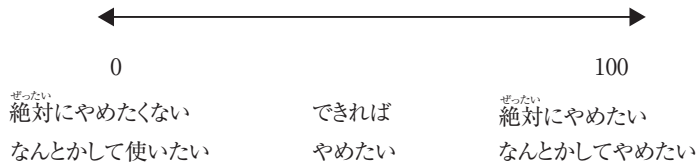
さらに、今回のクールでは調査のために、特別に付け加えられた要素がある。それは、アルコール・薬物を使いたい気持ちとやめる自信とをそれぞれ0(ゼロ)から100までのスケールで回答するというものだ。

テキストで第1回の最後のページには、「使いたい—やめたい」と「自分の意思の強さ・やめる自信」というタイトルのもとに、2本の横線が引かれている。両端内向き矢羽である。「使いたい—やめたい」の線の左端の下に数字の0(ゼロ)と「絶対にやめたくない／なんとかして使いたい」とある。右端下には数字の100と「絶対にやめたい／なんとかしてやめたい」とある。線の中央部あたりの下に「できれば／やめたい」と書かれている。「自分の意思の強さ・やめる自信」では、線の左端下に数字の0と「目の前にあれば必ず使えう／話を聞いたら欲しくなる」とある。右端下には数字の100と「目の前にあっても大丈夫」とある(図1参照)。

本来のSMARPPでは第1回セッションでのみ回答するものなのだが、調査データ提供という目的で、本クールでは毎回の終わりに2つの数字を参加者は回答した。そのためにファシリテータのスタッフBは「いつものやつ」と呼ぶようになった。テキストの「7ページ」であり、その日の続きではないページを開くことになるためか「7ページ」もこの部分を指す表現となった。

発言例として断片3を取り上げよう。これは1

① 使いたいーやめたい



② 自分の意思の強さ・やめる自信



図1 アルコール・薬物を使いたい気持ちとやめる自信 (松本ほか 2009: 7)

回目での、初めて SMARPP に参加した通所者 U¹³⁾ の発言である。前の発言者である G から指名されて発言を始めている。

断片3 「やめるデメリットなんて聞かない」
(1回目)

G: じゃあ, U.

U①: はい, んーと, えーと「やめたい」が 95 パーセント, え, えーと「自分の意思の強さ」は 80 パーセント.

U②: んーものだけポンとあったらべつに使わないけど, ものといっしょにセットでひとがいるとたぶん, 「使いなよ」とか「いっしょに使おう」とかさそわれるとだめかなってゆう. たぶんものだけだったらぜったいだいじょうぶ. トイレ

にポイッと流すぐらいにだけ. んーひとがだめですね.

U③: きょうは, はじめてこういうのやってみて, 意外となんか, で, メリットデメリットって考えることなかったけど, なかなかむづ, 考えるのむずかしいなって. とくに, やめるデメリットなんてえふつう聞かないから, なかなか, いろいろあるんだなーという, も思いました. 以上です.

B: はい, ありがとうございます.

Uの発言は, 大きく分けると3つの部分からなっている. ①使いたい気持ちとやめる自信, ②その理由, ③その日のプログラムの感想とである.

Uは, やめたい気持ちが「95 パーセント」で, やめる自信は「80 パーセント」としている. やめる自信が 80 パーセントである理由だが, 「ものといっしょにセットでひとがいる」状況では, 使ってしまうだろうという心配がある. 「ものだ

13) Uは表1の参加者一覧に情報を載せていない. 事情でこの日のみの参加となった. NA歴も SMARPP 経験もない人間の発言としてここでは取り上げている.

けだったらぜったいだいじょうぶ」と自信があるのだが、ほかのひとから「いっしょに使おう」と誘われたら断れないかもしれないというのである。

この毎回の自己評定は興味深いデータとなった。この点は後に詳述する。ここでは、断片3の最後の部分(U③)をみておきたい。Uは、これまでにSMARPPを受講したことがない。そのために、薬物使用のメリットやデメリットを考えるようなことはこれまでなかった。「とくに、やめるデメリットなんてえふつう聞かない」という。前項でみたように、この日のSMARPPでそのような問いかけを受け、自分で考え、ほかの参加者の回答を聞いて、「いろいろある」と思った。ここに、薬物依存についての新しい知識を提供するというSMARPPのねらいが実現されている一例が見られる。

ここまで、調査対象プログラムの概要を示した。以下では、その効果を示すために参加者の受けとめを中心に「効果」を論じていく。

5 SMARPPと言っぱなし聞きっぱなしミーティング

クールの序盤に参加者が、言っぱなし聞きっぱなしミーティングと比較して、SMARPPをどのようにとらえていたかを論じる。表1の9人の利用者のうち、言っぱなし聞きっぱなしミーティングよりもSMARPPのほうが好きだと言ったのは2人だった。その一例が断片4の入寮者Mである。

断片4 「スマープのほうがいい」(4回目後)¹⁴⁾

14) インタビューはSMARPP終了後に実施した。

X: そのNAと、言っぱなし聞きっぱなしのミーティングとそのスマープってどっちが好きですか。

M: おれは、おれはスマープのほうが好きです。

X: あ、そうなんですか。どういったところが。

M: 一番、あの、本見てやるじゃないですか。わかりやすいっすよね。字でこう、みんな読んで、こうやって、あのQ&Aとか。言っぱなし聞きっぱなしだと、おれ話がまとまんないんで

X: あー。

M: なに言ってるか自分でもわかんなくなっちゃうんですよ。

言っぱなし聞きっぱなしミーティングではなかなかうまく話ができないという趣旨の発言は参加者の多くから聞いた。とくに回復プログラム経験が短い利用者は¹⁵⁾、テキストがあって「わかりやすい」というところにSMARPPの魅力を感じていた。

これは、施設長AがSMARPPを施設Aのプログラムに組み入れようと考えた理由でもある。回復の初期段階の依存者にたいして「即効性のあるもの」と期待してSMARPPを取り入れた施設長Aのねらいは実を結んでいるといえる。

他方、プログラム経験の長い入寮者Gは、言っぱなし聞きっぱなしミーティングのほうがためになると感じていた。

「4回目後」は、「4回目SMARPP後」という意味である。

15) 施設Aの「回復プログラム」は、NAの12ステップを中核とするものを指す。

**断片5 「言っぱなしの聞きっぱなしの
うが自分のためになる」(1回目後)**

G: まあ両方ためになるんですけども、どちらかというところはNAとか、言っぱなしの聞きっぱなしのほうがなんか現実的というか。そちらのほうが自分のためにはなってると思うんですけども。

断片5の発言のように「自分のためになってる」とGは感じている。その理由は「なんか現実的」だからとのことだが、具体的なことはここからはわからない。

病院と施設の経験が長い通所者Rは、言っぱなし聞きっぱなしミーティングのほうがいいかという問いへの回答が以下である。

**断片6 「正直な話ができると心が軽くなる」
(1回目後)**

R: んっとね、やっぱり、話したあとに正直な話ができるとちょっと心が軽くなるというか。なんかホッとするというか、そういう感覚があって。たぶんそういうのが続くと、なんか効果が。自分でも効果が。たとえば、なんか悩んでて、それをミーティングで話したらなんか解決したとか。夜には解決したとか。そういうこと繰り返していくうちに、やっぱりミーティングは効果あるんだなっていうことを。

Rは、「正直な話ができるとちょっと心が軽くなる」と言っている。これは、表3で見た、Gの問題と対照的である。「ウソをつく」という問題をGは、アルコール・薬物を使うデメリットとして

いた。アルコールを飲んだり、薬物を使ったりしたのに、飲んでいない、使っていないと「ウソをつく」はめになる。やめると周囲に宣言しているから、飲みました、使いましたと正直に言うことができない。だからこそ、使ったこと、あるいは使いたい欲求があるということについて「正直な話ができる」と、Rの言うように「心が軽くなる」。つまり、「正直さ」は依存状態から回復していくために重視されているもののひとつなのである。

全体として、プログラム経験が短い利用者は、言っぱなし聞きっぱなしミーティングにおいて自分の話がうまくできないこともあり、SMARPPのほうが取り組みやすく好きだと感じていた。他方、プログラム経験が豊富で言っぱなし聞きっぱなしミーティングでも話ができるようになっている利用者は、SMARPPよりも言っぱなし聞きっぱなしミーティングを好きだと言った。

ただし、プログラム経験が短い利用者で、SMARPPが嫌いと言ったのが入寮者Kである。Kは、「クリーンの時間が短いからかわかんないんですけど、なんかちょっとぐあい悪くなることが多い」と言う。SMARPPでは、自分が薬物を使っていたときのことを考える。それで「思い出し」で欲求が出てくるというのである。その対策としてKは、あまり真剣に思いだそうとせず、テキストの設問に「だいたい」回答するということをしてきた。

内容が具体的であるだけに、SMARPPで具合が悪くなってしまうということはある。Kの場合は施設に入寮しているので、スタッフなどに相談することができる。通所者や病院のSMARPPではこのような事態への対応には配慮が必要であり実際になされているようである。

6 自己評定の変化

本節では、やめたい気持ちとやめる自信についての数字での自己評定の変化を見る。まず、ほぼすべて100だった2人の結果を取り上げる。図2がそれを示している。入寮者Gは欠席が3回あり出席回数が14回だった。一度だけやめる自信が70だったが、のこりはすべて100だった。入寮者Iは全回出席で、1回だけやめたい気持ちが95となったほかはすべて100だった。

Gが、やめる自信を70としたときの理由は、「前日調子が悪かった」というものだった。Gが「100, 100です」と回答するときは、「今日の気持ち」とことわるのが常だったことを考えるとやや意外な感もある。他方、Iが唯一100でない回答となった「やめたい気持ち」を95としたのは、マリファナ（大麻）を主題とする回だった。Iはアルコールにも問題があって、そちらを念頭に考えることが多いようだったが、このときは「大麻だったらやめたいは95」とはっきりと、大麻を特別扱いしていることを表明していた。

やめたい気持ちとやめる自信の両方を100とするパターンにたいして、やめたい気持ちを100とする一方やめる自信は低いというパターンも見られ

た。入寮者Hの図3がその例である。クルールの最初、Hのやめたい気持ちとやめる自信はどちらも80だった。両者の数字は同じだったりやめる自信のほうが高かったりしていたが、その後5回目のセッションでやめたい気持ちが100となりずっと維持される。一方で、やめる自信は80から50に下がり、50と70のあいだで上下動を繰り返す。やめたい気持ちが高く維持されるようになったきっかけは、家族の不幸である。親が亡くなり、薬物はぜったいにやめると誓ったことの反映だとHは言う。他方、やめることの困難も感じるようになり、また、「安心すると調子にのる」という自身の性格への自戒をこめて、やめる自信を低い水準で答えるようになっていく。なお、先のIと同じく、マリファナのセッションではやめたい気持ちが50と一時的に大きく下がっているのは注目にあたいする。

やめたい気持ち先行型から同調型へと変化したのが入寮者Mである。その変化を示すのが図4である。Mは当初、やめたい気持ちは90でやめる自信を50としていた。やめる自信が80となったがまた50に下がったりして、一貫してやめたい気持ちが90以上でやめる自信はかなり低いとい

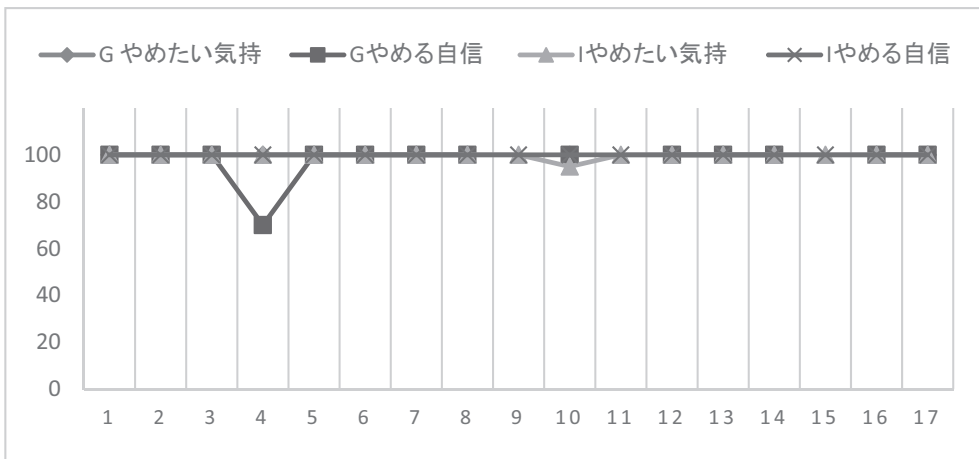


図2 ほぼ100, 100の2人

う気持ち先行型だった。それが、10回目にやめたい気持ちの100にやめる自信が100で並ぶ。これが3回続いたあとは、やめたい気持ちとやめる自信がともに60から50へと下がって同じ数値で推移している。

M自身は、この変化が回復初期に典型的なものと考えている。両方100となったのは、いわゆる「ハネムーン期」というのだろうか。「自信满满」だったという。それが、やがて「じつは違うんじゃないか」、「おれ、だいじょうぶか」に変わったというのである。やめる自信が下がったのみではなく、やめたい気持ちも同じレベルで下がって

いる点特徴的である。

これまでのパタンでは、やめたい気持ちがやめる自信より高い、あるいはやめたい気持ちとやめる自信が同レベルというのが多かった。それとは対照的にやめたい気持ちが低いのをやめる自信を高くすることでバランスを取るというパタンが見られた。入寮者Kがその事例である(図5)。図5で特徴的なのは、やめたい気持ちのほうがやめる自信より高かったのは17回中1回だけという点である。やめたい気持ちが15や20と極端に低い数値だったこともほかの利用者には見られないことである。そのようなやめたい気持ちの低さを

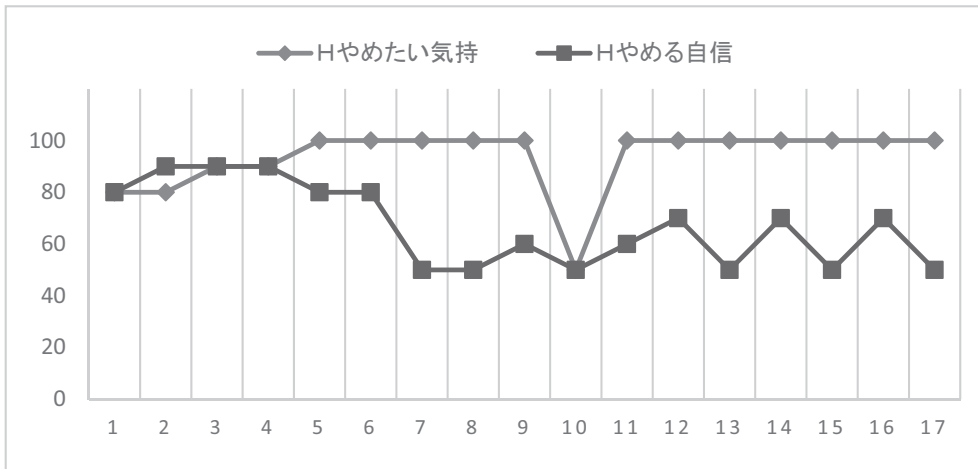


図3 やめたい気持ち先行型

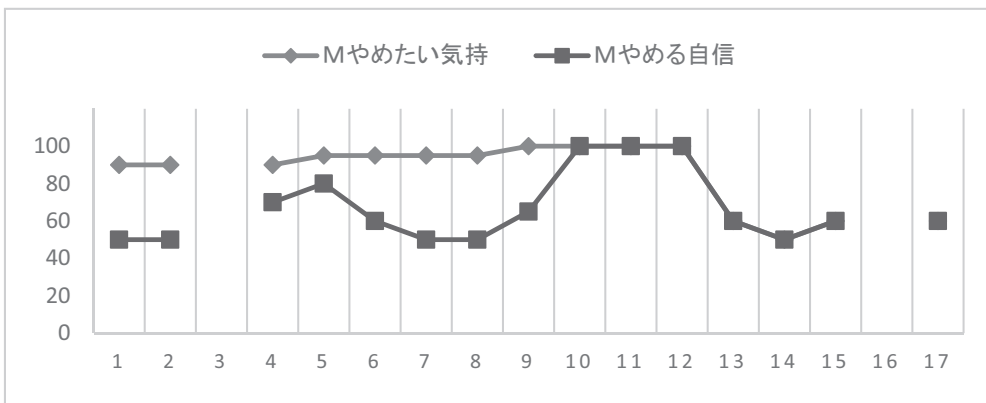


図4 やめたい気持ち先行から同調型へ

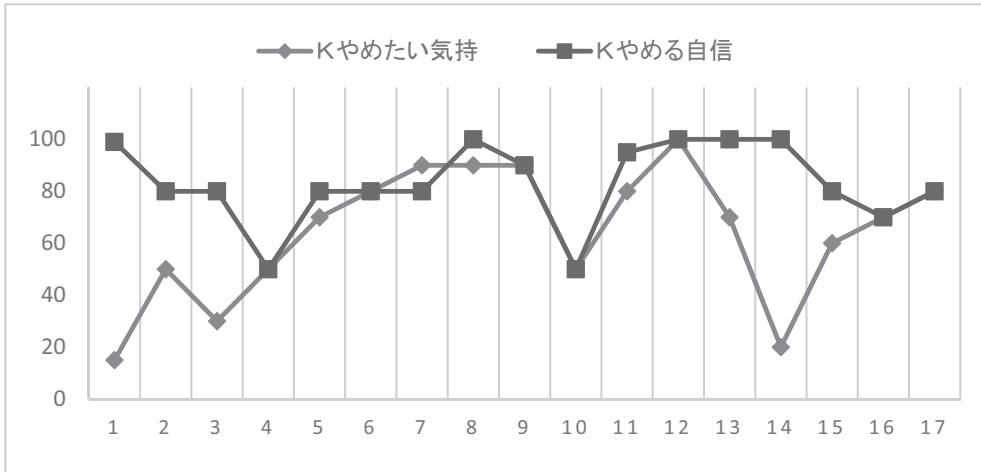


図5 やめる自信調節型

補うためにも、やめる自信は高く考えているとKは言っている。

ここまで見てきたように、やめたい気持ちとやめる自信を0（ゼロ）から100のスケールで表現することには、いろいろな考えが入っていた。なにかをものさしのようなもので「測定」するのではなくて、薬物の欲求をコントロールする手段として、数値を回答していた。

そのような考えは、入寮者Hとのインタビューにも見られる。断片7は、SMARPP最終の17回目終了後のインタビューからのものである。

**断片7 「いちおう50でいこうかなって」
(17回目後)**

南： じゃ、いま見ると100の50ぐらいが、ま、ある意味
 H： ちょうどいい。
 南： ちょうどいい。
 H： ちょうどいいかなって自分で思ってるんですけど。
 南： なるほどね。
 H： やっぱ話を聞いたらほしくなるってゆう

のはおも、やっぱ思うことなんでえやっぱり。

南： はいはいはい。
 H： やっぱ、話聞いても別とは、話聞いとゾワッてするときもあるし、やっぱそのへんはやっぱ、依存症だなんていうのは感じるんで、いちおう50で、もおいこうかなって。
 南： ふーん。

図3に見られるように、SMARPP終盤Hは、やめたい気持ちは100と固定しつつ、やめる自信は50と60を上下していた。最終17回目は50としているが、「いちおう50で、もおいこうかなって」と述べているのは、やめられると安心するのではなくて、やめられないかもしれないという不安を常に抱えているようにしようということであろう。

このように、2つの数値は、欲求などを「客観的に測定したもの」とらえることはできない。むしろ、欲求をコントロールするために、やめたい気持ちとやめる自信のバランスをとって、どち

らもが低い数値にならないように回答することで自分の状態をうまくたもっていたと結論することができる。

7 SMARPPの評価

SMARPP終了時のインタビューから、利用者がどのような点にSMARPPの良さを感じていたかをまとめる。

7-1 知識

SMARPPは依存症と依存症からの回復についての知識を提供することを目指している。そのうちのさまざまなところを参加者はSMARPPの良さとして挙げた。

よく言及されたうちのひとつは、使用の引き金である。

断片8 引き金 (16回目後)

H: あ、スマーブ。スマーブはこう、ん、ふだん考え、てないことをこう、勉強してるんでえ、やっぱひきが、今日もやった引き金とか、こう、ま、ふだんでも考えているというのもあるしこう、なんついたら、ま、スマーブはなんか復習みたいなかんじですね、自分のなかでは、こう、

断片8は、16回目終了後インタビューにおけるHの発言である。

入寮者Mも引き金を印象に残ったこととして挙げている(断片9)。

断片9 外的引き金と内的引き金 (17回目後)

南: 今回、印象とか記憶に残ってることとか、ありますでしょうか。

M: えっとね、外的引き金とか内的引き金と
かつすね。あと、ハルト (HALT) とか。

南: あーはいはい。

M: あとは、なんだろうな、あの、スケジュールをたてるとか。

南: あーなるほど。

M: いつもスケジュールたてても、けっきょくそのようにいかないんで、スケジュールその日にたてても、そこ同じ行動にいかないんでちょっと、あれかなと思ってんですけど。ま、スケジュールたてんのは大事なのかなーとも思いますし、はい。

SMARPPにおいては、引き金は外的なものとの内的なものに分けられている。前者が「自分をとりまく環境のなかにあるもの」で、後者は「自分の内部にある心や体の状態に関連するもの」である(松本・今村 2015: 23)。ハルト (HALT) というのは内的な引き金の一部であり、空腹 (hungry)、怒り (angry)、孤独 (lonely)、疲労 (tired) の4つを指す。

Mは、薬物使用の引き金に代えて、対策としてスケジュールにも言及している。「薬物やアルコールをやめてまもないとき、『何もすることがない時間』はとても危険です」として、「安全な一日となるようにスケジュールを作り、その通りに過ごすことは、しらふで過ごす日を引きのばしていくためのよい方法の一つです」(松本・今村 2015: 44) とある。

7-2 形式性

薬物使用の欲求をコントロールして回復を続けていくために必要な知識が、SMARPPを通じて得られていると参加者は感じていた。さらに、そ

の形式性が利点として挙げられた。

そのひとつは、テキストの存在である。重要な情報（知識）が紙のテキストに書かれているために視認性がよく、いつでも参照できる。断片8でHが言っているように「復習」にもなる。Hは、「ふだん考えてないことを勉強してる」とも述べた。

断片10 週1回やること（17回目後）

南：役に立ったのは、そういうところ？

H：ま、はいそうですね。あと、なんつったら、こうテキストにして、こう、やると、やっぱりこう、やめていくのってたいへんだなとか、引き金とかいろいろあるし、ハングリーとアングリーとかあるじゃないですが、タイヤードとか、ていうのもこう、意識しないと、ふだんは考えてないのが多いので、こう週1回でやるっていうのは、たぶんその時の時間は、2時間、1時間半とかは、やっぱり、まじめにこう考える時間があるので一役には立ってると思うんですけどやっぱり週1回やるのってゆうのは、すぐ忘れちゃうんでやっぱり。

南：ふーん。

H：はい。同じようなことを毎回やって、同じようなことではないと思うんですけど、まだいたい同じようなことを、こお毎週毎週やるっていうのはやっぱりいい、良かったなってすごい、思いますね。月1回とかだとたぶん忘れちゃうってゆうか。

南：あー。

毎週1回テキストを使って行うという形式につ

いてもHは、SMARPPが役に立ったところとして挙げた（断片10）。「ふだんは考えてないのが多いので」、たいせつなことを定期的に「まじめにこう考える時間」になるというのである。

さらにHは、テキストに書くというところにもSMARPPの良さを感じていた。

断片11 「書き出すってことが大事」（17回目後）

H：《略》スマーブで、こう、書き出すじゃないですかやっぱ。やっぱ書き出すってことが大事だと自分はんじ、思うのはあれなんです、感じるんですけどこおやっぱ。このお題お題について、こおやっぱ、書き出して自覚するっていうのがやっぱり、点検になるというか。

南：はい、はい、はい。

「書き出す」ことで「点検になる」とHは述べている。ほかの利用者では、SMARPPに参加するごとに配布されたテキストを保存して、それを見返すことで自分の回復のあゆみを振り返ることができているというMのような指摘もあった。

このように、テキストがあること、週に1回定期的を実施すること、テキストに回答を書き出すことなどの利点を利用者は感じており、SMARPPの形式性として本項では整理した。

7-3 ミーティングとの相乗効果

本論においては、NAの12ステッププログラムとの対比で、SMARPPの効果を考えてきた。利用者のなかには、両者の相乗効果を感じているものもいた。

断片12 「いいセット」（17回目後）

I: 《略》ただ、《間隙》両方ですね。これは、
 だいたいその、たとえばその、言いつば
 なし聞きつばなしで話とかをするで
 しょ。

南: はい。

I: そうしてこれをやるときには、その、言
 いつばなし聞きつばなしで、よく話して
 るものだから、その、質問とかあったら、
 自分の過去はこういうかんじでしたっ
 て。だからその、勉強っていうかもっと
 その、深く、見えるチャンスで。ん。そ
 れがあと、そうだね。その、アドバイス、
 意見とか、こっち《スマーブ》で、そうだ
 ねだから、いいセットだと思いますほん
 とに。ん。あぁすこしんと、わけがわか
 らなくなりましたけど、ん。両方いいと
 思います。

言いつばなし聞きつばなしミーティングでは、
 「自分の過去」についての話をすることが多い。
 だが、ほかの参加者から自分の発言にたいしての
 コメントが得られることはない。それが言いつば
 なし聞きつばなしミーティングの原則である。

他方、SMARPPにおいては、「アドバイス、意
 見とか」をもらうことができる。だから「いい
 セット」だとIは感じている。「両方いいと思
 います」と考える根拠である。

クールを終えた時点で、参加者はSMARPPの
 効果を感じていた。いちばん大きいのは依存症の
 メカニズムとやめるための方策というSMARPP
 を通じて得られる知識である。さらに、プログラ
 ムの形式として、テキストがありこれを使用して
 毎週1回決まった時間に行われ、その際に自分の
 回答を書き出すということをする。これは、記録
 として残り、続きの週あるいは次クール以降にお

いて振り返ることができる。

また、言いつばなし聞きつばなしミーティ
 ングとの比較を5節でまとめた。クール開始当初の見
 解だったが、このときには、どちらかがやりやす
 くて好きだという回答がほとんどだった。だが、
 クール終了時には、ミーティングとSMARPPと
 を両方平行して進めることの利点を挙げる利用
 者がいた。主たる活動である言いつばなし聞きつ
 ばなしミーティングを補完するものとして
 SMARPPの意義を認める回答と位置づけるこ
 とができるだろう。

8 指導者の見方

最後に、ファシリテータを務めたスタッフBと
 施設長Aの考えを見ておこう。

8-1 ファシリテータの評価

スタッフBは、参加者同士が「発言したり、ア
 ドバイスをあたがいがいしあったり」というところ
 に、SMARPPが回復にもたらす効果を見ていた
 (断片13)。

断片13 「どんどん発言するようになった」た (17回目後)

南: その、みなさんの回復に、どういうふう
 に役立ってると感じてらっしゃいます
 が。

B: んー、どうですかねえ。具体的には
 ちょっとわからないですけどーん、単
 純にみんながスマーブの中で発言した
 り、アドバイスをあたがいがいしあったりす
 るようになったことが、もう回復になっ
 てる、ようには見えますけどね。回復し
 てるっていうか、このスマーブの効果か
 分らないですけど。やってるなかでも

みんな、どんどん発言するようになってきて、えーま、スマープの内容はそうかって思っている人はいるのか、それをちゃんと具体的行動とかで、意識してるのかどうかはちょっとわからないですけどおふだんずうっと見てるわけじゃないんで、んーま、何人かは、あそうなんだとか、まミーティング、いったりとかスケジュール、なにスケジュール空けないことは、そういう効果があんのかってゆうのは、気づいてるひとはいるんじゃないかなとは思いますが。

「発言したり、アドバイスをおたがいしあったり」ということが「もう回復になってる」とBはまずもって見ている。つまり、SMARPPが提供する具体的な知識などよりも、その形式的特性が効果的だと主張している。言いつばなし聞きっぱなしミーティングでは、アドバイスをするということができない。SMARPPではこれができる。「どんどん発言するようになって」という変化は、SMARPPならではのものである。

Bが、SMARPPの具体的な内容がまったく役に立たなかったと感じているわけではない。「スケジュール空けないこと」と、スケジュール作りのたいせつさを挙げている。

断片13で述べられている、「発言」や「アドバイス」の重要さだが、これは、NAで重視している「フェローシップ」のひとつのかたちと考えることができる。「仲間」として支え合うということである。このことは、次回クールへの「課題」をたずねたときの回答にもみてとることができる(断片14)。

断片14 「こういう雰囲気にもってく」(17

回目後)

南： 次回の課題とかありますか。

B： つぎ、やるときですか。どうですかねえ。いやあーちょっと。課題は○○○○○《聞き取り不能》。ま、でもグループも成熟するんだなって思って。だから次回もし、期間あけてメンツが変わるんだったら、また、ん、こういう雰囲気にもってく、早くできるように、今回の経験は、

今回のクールは5か月におよび、その間に参加者の入れ替わりがすこしあった。だが、中核の参加者7人は固定していた(G・H・I・J・K・L・M)。Bは、「グループ」が「成熟」して良い「雰囲気」になったと感じていたのだろう。次回も「こういう雰囲気にもってく、早くできるように」というのが課題だと述べている。

スタッフBの発言から最後に、ファシリテータについての気づきの部分を取り上げよう。病院のSMARPPでは、医療専門家がファシリテータを務めて、出席している施設スタッフは当事者としてアドバイスをするに留まる。

断片15 当事者ファシリテータの説得力 (17回目後)

B： けっきょく、本当の経験とか失敗例がひびくのかなと思います。

南： あー

B： ま、わかんないですけど、これで、こういうときおれ使っちゃったよって話のときに、なんとなく、興味もってるかんは、多少、あったかなってゆう。だから、そこには、当事者がファシやる意味はあったかなとおもいましたけどね。それをたぶん、外部のひとは例だせないですから

ね、わたしこうでしたってゆう。

南： はい、はい。

B： まあ、それでも、そうですね。それは思ったの。ぎゃくに自分なんか、クスリいっぱい使ってもっといっぱい失敗してたら、もっといい例だせるのにとおもっちゃいますけど(笑)いろんなひとがやったほうがいいのかもしいないです。

南： そうですね。

B： はい。けっきょく、こうこうこうなったらこうなっちゃいますよってゆうより、こーなっちゃったよってゆうの方が、あ、ほんとなるんだって思う、かなとおもいますけどね(笑)

南： なるほどね、説得力が。わかりました。

Bは、「ぎゃくに自分なんか、クスリいっぱい使ってもっといっぱい失敗してたら、もっといい例だせるのにと感じた」と感じたという。医療専門職ではないということで、開始当初は若干の引け目を感じているようであったが、当事者としての強みを再認識したということのようである。

8-2 施設長Aの評価

施設長Aは、今クルールのSMARPPは1回目に参加したのみであった。施設外に出かけることも多く、われわれがオフィスの片隅を借りて終了後のインタビューをしているのをたまに聞くぐらいであった。

断片 16 施設長Aのねらいと再確認 (17回目後)

A： (略)で、ちゃんとそれを相談できてたりとか、ま、そこで1年、がんばってみようっていう答えを自分で出したりってい

うのはやっぱりそれなりにいね、あのーそのプログラムの効果、でありいね、そこーそれが全体のプログラムなのか、ほんとにスマーブとかね。どのプログラムが効いてるかって、もうほんとにぼくたちでも(笑)よく、わからない、部分ですよね。ん。でもたぶん、ね、ぼくも、ね、ぜんぶ聞いているわけじゃないんですけど、みんなのインタビューとか、振り返りで、話聞いているときにやっぱり、スマーブだと話しやすいつてゆう、ね、いってる人ひとが、けっこういるじゃないですか。

南： そうですね。

A： ん、あの、ぼくスマーブをやっぱりこう〇〇(施設)でやろうと思ったのが、ほんとに一番の目的は、あのうね、本来のスマーブの使い方と、施設での使い方ってちょっと違うような、ね。(病院の)外来とかでやって、発揮するものなので、施設でいつも、24時間、生活してるひとたち、ね。じゃ、スマーブが、どういう効果あるのかなーって考えたときにはやっぱりその、ミーティングとかであんまりひろい、ね、しろい自分のこととかいろんなことをこう表現できなかつたり、ひろいきれないひとがーひろく練習。なんか、答えることによって、こうひろえる、まなんか、それを、それを考えるとやっぱりスマーブ、ね施設でやってもそれなりの一定の効果はあるのかなーってゆうのが今回、ね、この調査やってもらって、ぼくも再認識できたところかなっていうふうには。

「スマーブだと話しやすい」というのは、回復プログラム経験の浅い利用者が述べていたことである。施設長Aも、そこにSMARPPの効果を見ている。「自分のことを表現する」の言いっぱなし聞きっぱなしミーティングの目的だが、それがうまくできない（「ひろいきれない」¹⁶⁾）利用者にとって、SMARPPは「それなりの一定の効果はある」と感じている。

「この調査やってもらって、ほくも再認識できたところ」という部分には、少し注釈しておきたい。本研究は、薬物依存者のリハビリテーション施設におけるやりとりを直接調査したいというねらいで実施された。SMARPPをすべて録画録音し、終了後にインタビューするということは、参加者にとってかなりの負担となる。その一方、外部の調査者が入り、それを通じて評価の視点がつねに提起されたということは、施設にとっても得るものにつながったということである。

このことは、施設スタッフのみならず、利用者も述べていた（断片17）。

断片 17 観察者効果（17回目後）

南： 刑務所でね。そうか。わかりました。ほかに、あのSMARPP関連で、なにか、おっしゃりたい、感じたこととかありましたら。

G： んーまでもいい機会を与えられましたと思いますねこうやって。取材を通し取材ってゆうかそういう機会を与えてもらえて。ま、また違った雰囲気ですることができたってというのは、一番自分のためにもなったんだろうし

16) 断片16中の「しろい」は「ひろいきれない」を言いかけて、「ひろい」の「ひ」が「し」と発音されているものだと思われる。

南： んー

G： んーいい経験にほんとに、なりましたね。

「違った雰囲気ですることができた」と入寮者Gは述べた。施設AにおいてSMARPPは何クールも行われてきた。その延長のひとつと位置づけたわけだが、調査（「取材」）の対象となっていることは、古くはホーソン研究も示すようにいつでもおきではありえない。それが肯定的に受けとめられたということは、調査を依頼し実施した者として幸いなことであったと受けとめるのみである。

9 自己理解とコントロール

SMARPPを通じて得たことは、7-1でみたように知識といってもさまざまである。それを、自己理解のレベルで述べた語りを最後に紹介したい（断片18）。

断片 18 依存症的思考と依存症的行動（終了後1か月）

N： あーそうですねえ。自分の状態を知ることとはできるとゆうか、あの、いま、依存症的思考におちいつてるなとか、

南： あーなるほどね。はいはいはい。

N： 依存症的行動をとってるなーてゆうことを検証できるというか、スマーブの知識を使って。

南： はい、はい。

SMARPPが終わって1か月後のフォローアップ調査時のインタビューにおいてのものである。Nの「自分の状態を知ることとはできる」という表現は重要である。「依存症的思考におちいつてい

る」、あるいは「依存症的行動をとってる」ということを、「スマープの知識を使って」「検証できる」とNは述べている。

NAが想定する回復は、断薬とスピリチュアルな成長（新しい生き方）とである（南 2014）。Nが示すような自己理解とコントロールは、断薬を続けスピリチュアルな成長を達成し新しい生き方をしていくために必須のものである。SMARPPを通じて、このような変化の萌芽が得られていることが本研究を通じて明らかとなった。

引用文献リスト

- 平井秀幸・南保輔, 2014, 「『矯正教育プログラム（薬物非行）』の質的分析に向けて：導入の背景とプログラム実施例の概要」『コミュニケーション紀要（成城大学大学院文学研究科）』25: 1-29.
- 今村扶美, 2015, 「はじめに」松本・今村『SMARPP-24：物質使用障害治療プログラム』金剛出版, iii - iv.
- 栗坪千明, 2018, 「回復支援施設における階層式プログラムの実践」ダルク編『ダルク回復する依存者たち』明石書店, 124-157.
- 松本俊彦, 2015, 「解題」松本・今村『SMARPP-24：物質使用障害治療プログラム』金剛出版, 163-179.
- 松本俊彦・今村扶美, 2015, 『SMARPP-24：物質使用障害治療プログラム』金剛出版.
- 松本俊彦・今村扶美・小林桜児・和田清, 2009, 『SMARPP-16：物質使用障害治療プログラム』.
- 南保輔, 2008, 「教育効果特定の手がかりを求めて：薬物依存離脱指導の観察と受講者インタビューから」『成城文藝』203: 138-103.
- 南保輔, 2014, 「断薬とスピリチュアルな成長：薬物依存からの「回復」調査における日記法の可能性」『成城文藝』227: 62-42.
- Narcotics Anonymous, 2012, 『ステップワーキングガイド』日本語版, Narcotics Anonymous World Services.
- 成瀬暢也, 2017, 『誰にでもできる薬物依存症の診かた』中外医学社.
- 相良 翔, 2018, 「用語解説」南保輔・中村英代・相良翔編『当事者が支援する：薬物依存からの回復 ダルクの日々パート2』春風社, 257-265.

A Study of SMARPP at a Drug Addiction Rehabilitation House: On “Effects” Observed in Field Research

Yasusuke Minami (Seijo University)
yminami@seijo.ac.jp

ABSTRACT

SMARPP, a program designed to help recovering drug addicts, is based on cognitive behavioral therapy. In the SMARPP program, people meet regularly and learn how to maintain their lives drug-free. They read material provided by SMARPP and discuss their experiences. In addition, they comment on experiences shared by other people and give advice to each other. This differs from the other common meeting format used for recovering drug addicts in which participants just talk and listen; in SMARPP meetings, people discuss and exchange ideas. To study the reactions of recovering drug addicts to these two meeting formats, in 2018, a study was conducted at one drug rehabilitation center where both meeting formats were in use. All of the SMARPP meetings held at this center were video- and audio-recorded. As many participants as possible were also interviewed individually after each SMARPP meeting, and were asked to compare the two meeting format types.

Participants who had just started the recovery process were found to appreciate the SMARPP meeting format more than the “just-talk-and-listen” meeting format because they had not yet learned how to reflect on their own drug use problems and effectively communicate their experiences to others. Those who had been in recovery for some time, on the other hand, preferred the just-talk-and-listen meeting format. Regardless of their time in recovery, most participants appreciated information acquired through SMARPP. Some liked the formal structure provided by SMARPP, such as the writing exercises and the weekly meetings. Some participants believed that the combination of SMARPP and just-talk-and-listen meetings provided a powerful tool to assist them with their recovery. All in all, the director of the drug rehabilitation center was satisfied with the SMARPP program conducted at the institution.

KEYWORDS: drug addiction, recovery, SMARPP, cognitive behavioral therapy